



三十三間堂の柳の棟木

はじめに

観光名所として有名な京都の三十三間堂の棟木は、柳で造られたという伝説や昔話が日本各地に伝わっています。内容に多少差異はあるものの、おおよそ次のような話です。

「切られるところを救われた柳の精が、恩人との間に子どもをもうける。何年かたつと京都で三十三間堂が建てられることとなり、くだんの柳は棟木の建材として切り倒され、京都に運ばれる次第となるが、どうしても動かない。そこで柳の精の子どもに曳かせると、スルスルと運ばれていった」

しかし、柳は材質が軟らかく建材には不向きであり、ましてや長大な建築物の棟木に使用するのは、たとえ伝説や昔話であっても、なかなか納得がいくものではありません。杉や松ならともかく、どうして柳を棟木とするような話が、全国で語られるようになったのでしょうか。

登場する柳

ここまで、柳は登場していませんが、例えば永享12年(1440)の『五重間書』には「後白河院の前世の鬮から柳が生えており、それをとると頭痛は止んだ。この鬮を仏に入れて本尊となし、三十三間堂を建てた」となり、だいたい15世紀頃から柳が後白河院の頭痛の原因として登場し、不思議なことに定着していくようです。

その後、脚色が進み、17世紀後半の『紀南郷導記』になると、「故に此楊(柳)ヲ以テ棟木ト為シ」て三十三間堂を建てたとし、柳が棟木に用いられるようになります。

浄瑠璃で取り上げられる

これと同じ延宝元年(1673)頃の浄瑠璃『熊野権現開帳』は、このような話を取材したと思われる、鬮を貫いている柳の精が人間の妻となり、子どもをもうけ、最終的に三十三間堂の棟木にされるといった内容が取り込まれました。

そして、この浄瑠璃は宝暦10年(1760)初演の複雑長大なストーリー『祇園女御九重錦』に受け継がれ、その後、くだんの内容が『三十三間堂棟由来』として独立し、現在に至るまで上演される人気作となりました。こうした浄瑠璃が全国に知られることによって、最初に見たような伝説や昔話が全国各地に根付い



三十三間堂(京都市東山区)

花山天皇の頭痛

さて少し話は飛びますが、平安時代ごろから熊野三山(本宮大社、速玉大社、那智大社)が聖地として注目をあつめ、熊野詣が貴族たちの間で流行したことにより、次のような

ていったと考えられています。

なぜ柳なのか

これまで、柳を棟木とする伝説が各地に根づく経緯をみてきましたが、まだ疑問が残っています。永享12年(1440)の『五重間書』に柳が登場するまで、つまり15世紀以前は、松や岩も頭痛の種に用いられていました。それがなぜか柳に定着してしまいました。

楊枝浄水供

この理由について、三十三間堂で毎年1月に行われる「楊枝浄水供」に関係するという説があります。これは僧侶がお経を唱えながら、参拝者の頭に柳の枝で浄水を振りかけ、無病息災を祈る行事です。現在の形式になったのは大正時代からですが、後白河院の時代からこの原型が三十三間堂で執り行われていた可能性があり、こうしたことから三十三間堂と関連のある柳が、後白河院の説話と結び付けられたというのです。

柳ではなく、柳(ナギ)?

この説は有力ですが、私は柳ではなく、当初は柳(ナギ)だったのではないかと考えています。柳(ナギ)は高さ30m、直径1mにも達するマキ科の針葉樹で、床柱などの建材にも使われます。日本で

話が建暦2年(1212)から建保3年(1215)の間に成立した『古事談』に伝えられています。「花山天皇が頭痛を患い、雨が降ると特に痛んだ。那智で千日の修行をした安部晴明に診せると、天皇の前世は尊い仏道修行者で、(熊野の)大峰で亡くなられた。その鬮は岩の間に落ち込んでしまい、雨が降ると岩が膨張するので痛むのだと言うので、鬮を取り出してみると、頭痛もすっかり治った」

その後、火災によって全焼し、文永3年(1266)に再建された建物(吉口伝)の嘉元3年(1305)2月6日の記には次のような説話があります。「後白河院が熊野に行幸した際、前世は熊野本宮の蓮華房という行者で、その遺骨が(熊野の)滝尻にあるというお告げを受けた。その場所(三十三間堂)を得て帰京し、蓮華王院(三十三間堂)を創建した」

この話は三十三間堂の創建由来として語られており、やはり熊野と関連づけられています。同じ頃に成立した『雑談集』には、後白河院が頭痛に悩んでいたところ、祈念すると前世は三井寺の法師であり、鬮に松の根が生えていることがわかり、それを取り除くと頭痛が治ったという、花山天皇と後白河院の説話をあ

わせたような話が記されています。

後白河院の説話

三十三間堂こと蓮華王院本堂は、長寛2年(1164)に造営され、の分布の北限は、三重県南部または山口県なので、それより北では比較的なじみの薄い樹木といえます。そして、熊野では霊木としてあがめられ、速玉大社の樹齢千年の柳(ナギ)などを始めとして各地の神社に植えられるなど、少なくとも平安時代末期には熊野と柳(ナギ)は強く結び付けられ、熊野信仰のシンボルとなっていたようです。

後白河院の説話を広めたのは、熊野の導師たちだと考えられていることは前述しましたが、彼らにとつて柳(ナギ)は後白河院と熊野を結びつける樹木として、柳よりも相応し

いといえます。しかし、京都周辺、また以北ではなじみが薄いため、柳(ナギ)は人々に受け入れ難く、字音や字面の似ている柳に移っていったのではないのでしょうか。そして上手いことに三十三間堂では柳と関連のある除病祈願が営まれており、自然と定着していったのではないかと思うのです。

おわりに

しかし、柳(ナギ)がこのような説話に用いられていた記録はなく、また奈良の春日大社には古くから植栽されて神事に用いられていたなど、京都周辺から以北にお

ける当時の柳(ナギ)の認知度については不明なので、これは妄説にすぎません。

いずれにしても柳の棟木の事例は、伝説の形成と伝播に浄瑠璃のような演劇が、深く関わっていることを示しています。これも三十三間堂が長きにわたり存在し続けたおかげで、もし江戸時代以前に無くなっていたら、柳の棟木の話も浄瑠璃に取り上げられることはなく、全国各地で数百年もの間、語り継がれることはなかったでしょう。

(文：江口知秀)



子と夫に曳かれていく柳(出典:『熊野権現開帳』電子版「霞亭文庫」より。提供:東京大学附属図書館・情報基盤センター)